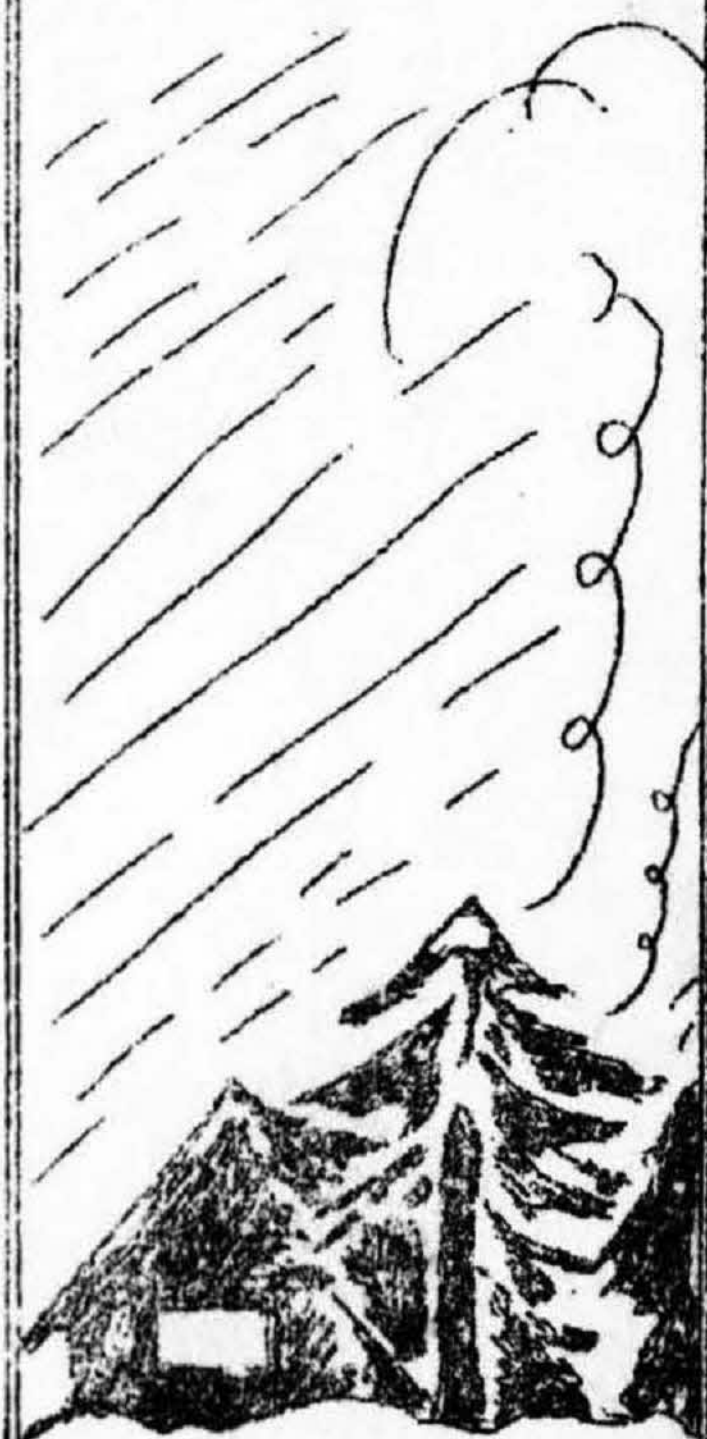


報會



号八第年二第

昭和六年十月十五日発行

通巻十三号

子供

朝に晩に自轉車に乗って東京の街を走り廻って生活してゐる私である。生きる苦しみをつく／＼思ふ。希望だとか理想だとかは昔の夢だ。山だとかスキーだとかと一緒に今尚生きて居られる人々が羨しい。自轉車に乗って街を走っていると、何時も私は街路で遊んでゐる小供を視る。小供は実に沢山居る。何処の露路でも子供で一杯だ。面白いことは、小供は自分の頭にある一つの事以外は何も考へてゐない。一尺先に何が来ようと一向に無関心である。軒に雀が居ると雀を見ながら歩いてゐる。それ以外は何も注意してゐないらしい。実に朗かな顔である。自轉車が子供と衝突する位に近付くと驚いて駈けだす。思ひのことだ。大人は路を歩いてゐる時は、前後左右充分に気を配つてゐるのに。

(平家蟹)

山の本

最近出る山の本には随分インチキなものが多い。世間へ類出しの出来ない様な理屈を述べたりなんかしてゐるのは未だ可哀い方として、外国の本の譯訳に至ると、一体何処をどう読んでゐるのかといふ様なのを、臆面もなくさらけ出してゐるのには、何とも申上げ様もない。近頃氣付いた中から、如何に滑稽であるかを少しばかり御目に掛けて見ませう。

『疲れる事を知らない本能に駆られて、彼は何時も、嶮難な岩山へと向つてゆく。其処に於て彼の誇らかな氣持が始めて満足されるからだ。そして又彼は絶えず数々の危険の中へと突き進んでゆく。何故ならば、其の中に於てこそ始めて、彼の生活が本来の姿に立歸るからなのだ。抑制し難い彼の肉体の力も、亦常に高きものを求めて止まない彼の心も、此処に於て始めて安位の地を見出すからなのだ』

以上の文を、「雪・岩・アルプス」といふ小本の第十一頁之行目以下を讀み合せて下さい。

又、處女峰登攀史といふ小本の百三頁にヤングの詩が泣いてゐる。

嘗つての輝しかりし日は永遠に我に歸らざるか。それ等の日の夜のみは今も尚変らざるに。夢に空高き路を歩み、心は遠く山にあれども。

遂になしとげ得ざりしそ、ばくの山こそあれど
我恨むまじ。心に深く山を憶ひ、嘗つての日の
夢をこそ守らん。

又、その本の本文は誤訳だらけで、一寸紹介し
兼ねる程だ。序文の中でも小島鳥水氏が大変なヨ
タを飛してゐる。

コンウエイがモンテローザに初登攀したり、レ
スリースチーブンの「歐洲の樂園」の中に、ビー
チホルンの登攀記があつたり、其他は云はずに置
かう。

出版界が日本時代なら、山の本はヨタ物時代が
も知れない。
(浦松生)

山と召集

七月の初旬に商用で上京し諸氏に御目に掛かつ
て署名した翌日は當地鎮台へ正八位殿の初登城の
日だつた。ハイカラー、胸廣腰狭的の軍服も仲々
粋なものだ。学生時代の山嶽部生活が僕をそうさ
せたのか、歩兵には僕は最適との評があつた程、
十星の耐熱行軍も断然吾小隊長のリーダーで終り
近くには兵隊から急ピツチに物言ひが出た位。頗
上りたいと雖も、この道だけはまだ自信がある。

併し一瞥弱らされたのは、毒瓦斯練習だつた。
第一回は天幕内に充満した催涙性瓦斯の中へ這入
つて、真気蘇験の爲め、一寸防毒面をはづすのだ

が御縮荷さんの狐でもない正八位殿も、これだけ
は、幾ら山の天幕で熊さん、パンチマンの窒息性
瓦斯で訓練されてるとは言へ、一溜もなく落涙十
数分退却を余儀なくされて了つた。將來の戦争に
は氣象學の應用が重要なもの、一つとなつたが、
此際御得意の諸氏から瓦斯使用及び防禦に關する
研究の提示あるのを願つて置く。

どなつて走つて、いばつて、苦しんだ四週間の
勤勞報酬が國費の金六拾五圓也。生れて初めての
給料なるものに有り附いたのだから嬉しさはかな
りなものだつた。涼しいサツクコートに自由を得
た樂しさと、多数の男を駆使し得た優越感とは、
さながら山の頂上に達した時のそれと同じだ。そ
れに官費便達の喜びがある。早速山へと言ふ所だ
が、湘南の海へ飛んで了つた。そしてハアスマイ
ルズからハアレックスからの自然美を愛した。
今年の夏も山の記録は残せなかつたが、機會さ
へあれば山入りの野心は充分にある。

歩兵生活も一夏の山程の苦しと樂しさのある事
を紹介して、同志への挨拶とする。
諸氏の健康を祈つて
(ナグマ栗)

今日このごろ

この商店の旅行で富士五湖へ行きました。小俣
から奥瀬あたりの小さな山に生ひ繁げる松の林が

何んともあ、青々と生々と見えた事か。早や穂を出しかけた時がなよ／＼となびき、木々の木末をかすめて動いて行く白雲をいつ迄も見詰めて居た目は、遠く飛騨の荒野を返風に飛ぶ大らかな雪の峯を夢見て居るのでした。船津に泊った夜、唯無心に三つ峠をあほながらあの長い尾根をひたすら上って行きました。小さな不動堂の裏からは、矢車草とあざみが一面に咲いて居ました。月がなかつたので蠟の心臓が頂度、富士の上に、橙色にかゞやき、河口湖はいぶし銀に重く沈んで居ました。草の端になく虫の音もなく、静まりかへった中に遠く富士の山嶺から走り出た鋤丸屋が星の光にはつきり浮出して今にも動き出すかと思はれました。夜露にぬれてしっとりとした草の葉を分け下って居た頃は夜も大分ふけたか、三ツ峠の右肩にスバルが目に一ぱい涙をうるませて静かにまばたいて居ました。

(雲)

こ ども

八月二十日の夕、次の様な端書が私を待つて居

た。

拝啓 酷暑の砌貴殿益御清栄の段奉大賀候承れば此度御、豚児御誕生の由、會報掲載の都合有之、生年月日、御名等、左記の箇所迄御通知被下度候

神田區連雀町一八、手 塚

二伸、猶備考として御子様の性質、容貌、悪癖、徴兵関係(令嬢ならば不要)宗教等附記あらば幸甚。

針葉樹會庶務幹事代理

さて八月二十日の御同合に対し今頃答を出すのは聊か時候外れの様だが、それには譯のあること。其一は御豚児の悪癖及宗教に恐れをなしたこと。其二は性質及悪癖について研究中だったこと。もう生後六十日位になって所謂備考の種も出来ましたから謹んで御通知申上ます。

昭和六年七月十七日生、浩一(男)性質、満腹時温暖、空腹時亢暴。容貌。父親に酷似(衆評一致)、悪癖、切角の御注文ですが未だみつきりません。徴兵関係、甲種合格。宗教、寝顔が地藏の様だから多分佛教でしょう。起きたら本人に尚よくきいてみます。これで如何です、幸甚でしょうか。

課外ゼミナール。五感の機能に因する若干の考察。

成人の場合とは正反對に、味覚、触覚が最も鋭敏で、五感中最も通れてゐる。嗅覚は働いてゐるのかどうか、殆んど判別しがたい。(七矢衛)

出 生 届

子供が生れると二週間以内に届出をせねばなら

ない。其面書に父として自分自身の名を署名したとき、不思議な心持になった。父、それは嘗て自分の父親以外には用ひた事のない文字だった。が今や自分自身に用ひる時が来た。(七矢衛)

川 苔 山 へ の 一 登 路

川苔山への一登路として獅子口沢の溯行をおすすめしたい。大丹波川は源頭に至って三の澤に分岐する。中央真西に向ふものをオドリ小屋、北東に向ふものを八小屋。南に向ふものを獅子口沢といふ。獅子口沢は獅子の口に似た岩の裂目から滾々と流れ出る地下水の奇觀を以て知られてゐる。此獅子口岩から谷筋を行くと約百米で十米位の瀧(水はない)にぶつかると。左右どちらの麓にでも取付ける右の方が衆だ。高廻りして上手に出たら其儘ドン／＼谷筋を登ると聴て二分する。右がよさうに見えるが少し多くと藪になるから、左手をとって進む。段々加はる傾斜と共にガウ場となつて稍安定を欠くが、大した事はないから其儘強引に押切つて直登すれば、菱蔘粒山からの明瞭な踏跡のある尾根に出る。獅子口岩から約一時間、そこから、ひ字形の谷を隔て、真南に望む川苔山頂まで僅四十分行程に過ぎない。昨年の秋、日蔭沢附近の炭焼小屋附近から川苔へ新道が開かれた様だが、其尾根道(?)よりは獅子口沢をツメた

方が遙に興趣が多いと思ふ。

(七矢衛)

記 録

八月廿日、快晴、大藏沢溯行

○ ○

此の間崎玉縣下を約二週間で歩いて来た、会社の用で行ったんだからさう氣儘に歩き廻る事も出来なかつたけれどそれでも僕には愉快だった。地図の上に赤い線や青い線を入れる癖(と同時に趣味)のある僕にとつては例へどんな用件であるにしろ官費で旅行の出来るといふ事は有難い事であるんだ。

今まで陸測の廿万や五万に親しんで居て何々堂衆行とかいふ分縣地図なんて馬鹿にしてゐて用のないものだと思つて居たが今度日々新聞の発行の分縣地図でも相當有用なものだといふ事が解つて感心した。

今度は埼玉縣へ行つてくれ給へと百枚許りの出張材料を渡されるとそれを自分で郡別、村別、字別として地図の上に記入して行く、その氣分といふものは中々いい。極端に云へば未知のものに対する憧れだろう。それ程口マントイクでもないがまあ楽しみなものだ、思はぬ宿場で思はぬ拾ひ物をしてたり、汽車の中で蕎麦の種屋さんと間違へられ

てもそれにバツを合せてそのまま、種屋さんになり
済ませるのも田舎の契約者代理店を訪問して色々
聞き詰めて来たお影である。ツケ一ツしは今年に
い、所で三円位だんべえと云はれて何貢目が三円
なんかもわかるし、それはサナギが中に居る儘だ
って事も初めて良解した様な訳だ。

今度は九月十二日から千葉縣と神奈川縣を歩く
事になつてゐる約昨五日間だから相當永い、面白
い話でも沢山拾つて来て此の紙上に発表出来ない
分は同好の士にだけ針葉樹會の席上でゞも公開に
及ぼうと思つてゐる。

序にこゝで僕の所では来年二月頃二番目が生れ
る事になつた事を却報告して置く、男が欲しいと
思つてゐる。

六、九、一〇、（熊）

夏 枯

針葉樹會報も余り記行文もニギ／＼しくなく山
のパンフレットの様にも思はれぬ。そう言へば針
葉樹會も山の會の陰が薄い様だ。一体何してゐる
んだらう。山へ行つた話も余り聞かない。これぢ
や学校の連中の事も余り言へなくなる。さてお前
と云はれると頭をかいなきやならないが、今年の
夏は全くやられちゃつた。夏の風邪は長つと云ふ
が一ヶ月も續いちややりきれない。やつと直りか
けて来たら今度は九郎ちゃんのお孫を奪つて胃の

消化が悪くて苦しみ、おまけに悪い時は悪いもの
で舌に苔が生えるなんて云ふ珍病（余り自慢には
ならないが醫者曰く極めて珍しい病氣の由）にか
ゝり弱りきつてゐた。

それでピン／＼して浴衣がけて團扇でも使つて
ゐる奴は実に羨しかったいや羨しい所が癪に障る
様だった。併し此頃はすつかり直つて又元氣に歸つ
て元氣になりました。秋風もそろ／＼吹いて来た
どうです皆さん一つ何処か出かけませうよ。

（三角）

村尾氏より

村尾金二氏より次の如き手紙あり、

謹啓

父儀死去の際は御鄭重なる御弔詞に併せて愛
前へ諸福なる御挨拶を賜り御厚情奉深謝候乍
畧儀以書中御厚禮申上候

昭和六年八月

村尾 亨

金二

針葉樹會 御中

スィス便り

御無沙汰致しました。
皆様お成り御座いますせんか、私は只今スエツル
のグリーンデルワルトに参つて居ります、目の前

に兼ねてゐるが、此のスパースアルプスのゲルラパが
そびへて居ります。私の部屋からはアイガーが
押かぶるやうに見へます。左手にはウエッター木
ルンがそびへて居ります。

又等の山々の間と、緑の草原と針葉樹のまばらな
林と共に横はる此のこぢんまりした村はほんとに
好い所です。此処に居る人は全て見得もなく、自國
他國の境なく親しみ合つて居るやうです。道を歩
いてゐると知らない人も挨拶して行きます。何ん
となくアウトホームな感じ、それが我々他國の人
間にとってはおとほほしい事です。

此処では巴里のシウクなスタイルもはやりませ
ん、重い登山靴リユークサックにピッケルとこれに
日に焼けた顔とれがあれば一人前です。昨日は早
朝此処を立つて劍のアプト式の電車に乗つてユン
グフラウヨツ木に行きそこから往復約七時間のユ
ングフラウ行をやりました。既に山とは大分縁が
離れた僕でしたが、いざ行くとともに愉快で
した。借物の登山靴（これは村の義やで損料供を
するのです）とピッケル（これはガイドのもの）
とを以てガイドのマテルブルグナーと朝一番の奴
に乗った電車は一旦谷底に下りてから可成の急斜
を上り途中二三の駅に止りシエーゴツキの峠に着
く。此処からラウテンブルグナー六面の電車が下り
て行く。此処から世界的に運賃率の高いヨツ木行

のに乘る目前にユングフラウを仰ぎ乍ら電車はゴ
トゴト登るやがてトンネルだトンネルの途中三つ
折れがある。そこは岩の窓が出来てゐて乗客に
途中の景色を見せるやうになつてゐる。八時五十
分ヨツ木着直ちにその建物の一番上まで行きそこ
から雪の上へ降り出す。そこでザイレンして先雪
の谷間に下りるひざ位までぶか／＼は入るのどと
ても歩き難い。やがて登りだ、可成急だ、ガイド
の足跡について行く一寸平均を失ふと足がぶかぶ
かもぐる。十一時一寸平坦な処へ出る。そこでサ
ンドウイッチとガイドの持つて来た紅茶にうまい
晝食をすまず、済むと又直ちに上りだ。途中一ヶ
所の岩壁の末遂に頂上に着く。そこには雪の凍りつ
いた一本の棒が立つた。十五分位で今度は僕が先
き下り出す下りるのは上るのより一層骨だ。雪の谷間へ来ると
午后の目を浴びて雪の状態がとて思く足が一層深くめり込む
歩き難い事らしい。此処で大分へばつた。斯うなるとヨツ木に行くの
がとて長い道になる。見へてゐて中々だ。どうやらそれでもヨツ木に
だどり着いたのが三時一寸前。鉉索にやつと思を吹きかへして直ちに又電
車斯うしてグリーンデルワルトに着いてホテルに敵ると簡単な夕食后
直ぐ寝て了つた。とに角昨日の登山行は折柄の上天気の良いとて
も晴れどした気分だった。然し眺望をゆつくり楽しむ事が出来
た。たぐいし行程だった。今夕食のカネが鳴った。それでは
又御免様よう。

八月廿日

スミス グリンデルワルト

森竹 生